Tarkāmṛta における言語論

細野 邦子

0. Navyanyāya では、正しい知 (pramā) として直接知、推理知、類比知、ことばの知 (śābabodha) の四つを認める。これらの知は対象を保持する者 (viṣayin) と呼ばれ、その対象 (viṣaya) は一定の枠組みをもっている。すなわち、知の対象は規定者 (prakāra), 被規定者 (viśeṣya), 両者の間の関係 (saṃsarga) から構成される。例えば、‘ayaṃ ghaṭaḥ’ という直接知が生じた場合、この知の対象は、被規定者である眼前の個体、規定者である瓶性 (ghaṭatva), 被規定者と規定者の関係である内属関係から構成されている。ことばの知も例外ではない。その対象は、文を構成する諸形態素 (pada) によって表示された諸 padārtha とそれらの間の関係から構成される。それでは、どの pada の padārtha がどの pada の padārtha の限定者 (viśeṣaṇa) となるのか、また限定者となった padārtha (規定者, prakara) と被限定者となった padārtha (被規定者, viśeṣya) の間の存在論上の関係はいかなるものか。本稿では、17世紀に Navyanyāya の言語理論を確立し Śabdaśaktiprakāśikā を著した Jagadīśa の手になると考えられている¹⁾ Vaiśeṣika 系統の綱要書 Tarkāmṛta の Śabdapramāṇa 章に基づいて、それを明らかにしたい。そこには、文を構成する pada によって表示された padārtha 間の限定被限定関係の全体像が簡単にではあるが示されているからである。これは、Nyāya 学派の存在論の体系に、PS との整合性を保ちつつどのように語の意味の関係を対応させているかを知る手がかりになると考える。すでに長尾陸司教授が、[Naiyāika の kṛti 説]²⁾ において、Parama Laghu Mañjūśā, Nyāyasiddhānta-muktāvalī およびその注釈、Śabdaśaktiprakāśikā 等に基づき、次の四点を指摘しておられる。(1) 人称語尾は努力を直接表示する (2) それは言語認識にあっては第一格語尾を備えた語の意味の特徴 (限定要素) として顕現するものとして処理される (3) この様な処理の仕方は、第一格を備えた語の意味が言語認識において主要素となるのであって、他の諸意味は全てこれの限定要素として分析されねばならないという原則に基づくものである (4) この原則は第一格語尾の語によって言及される実体の観念が、Nyāya 学派の存在論の体系において卓越している事

実と関係するであろう。本稿はこの原則を詳しく示すことになる。

1. まず pada とは何か。TA において pada は śakta と定義される³⁾。śakti は「[ghaṭa] 等の pada の瓶に対する [関係] (ghaṭādipadasya ghaṭādu)」⁴⁾ と説明され、pada はこの śakti 関係の pratiyogin となる。一方、一般に śakya と呼ばれる padārtha は anuyogin である。この pada は、ŚŚP では、まず語幹 (prakṛti)、語尾 (pratyaya)、不変化詞 (nipāta) の三種類に分類される⁵⁾。さらに、語幹は名詞語幹 (nāma) と語根 (dhātu) の二種類に⁶⁾、語尾は vibhakti (格語尾 (sUP)、人称語尾 (tiṅ))⁷⁾、dhātvaṃśa, kṛt, taddhita の四種類に⁸⁾ に分類される。PS において pada として規定されている格語尾で終わるもの (sUBanta) や人称語尾で終わるもの (tiṅanta)⁹⁾ は ŚŚP では文であると考えられている。それでは、これらの pada によって表示された padārtha 間の関係をみていこう。[なお、padārtha は普遍に限定された個体 (jätiviśiṣṭavyakti) であるが、TA に従って、pada 'grāma' の padārtha は村 (grāma) と簡略化する]。

前述したように、padārtha 間の関係には限定被限定関係と規定者と被規定者間の関係がある。まず、ŚŚP に従って、各 pada によって理解される padārtha の間の限定被限定関係を明らかにしたい。vibhakti (sUP, tiṅ) について「ある語が、自己の意味に対する、自己の語幹の意味を叙述者 (vidheya) とする関係の理解に対して生起させる力をもつ場合、その sUP 等は vibhakti と呼ばれる」と述べられている。例えば、'ghaṭam' の am によって 'karmatvaṃ ghatiyam' と、'pacati' の tiP によって 'kṛtiḥ pakīyā' というふうに、自己の意味に対する語幹の意味の、前者を被叙述者、後者を叙述者とする関係が理解される¹⁰⁾。kāraka については次のように述べられている。「語根 a によって想起された意味 A に、結びつき規定者となって理解される sUP の意味、それが語根 a によって想起された行為 A に対して、行為を成り立たせる要素 (kāraka) となる」¹¹⁾。このように、sUP の意味が kāraka である場合、それは語根の意味を限定する。また、tiṅ については、「語根の意味に限定された自己の意味である努力、それを叙述者とする関係を理解させる力をもつ語が人称語尾 (ākhyāta) である」¹²⁾、「語根の意味に限定された tiṅ の意味の関係の理解に対して、a を終わりにもつ名詞語幹によって想起されることが原因である場合、a が sUP の中の第一格である」¹³⁾ と述べられている。このように、tiṅ の意味は第一格で終わる名詞語幹の意味を限定する。第一格を終わりにもつ語幹および第一格については「瓶等の語は、第一格を終わりにもつものとして確定された場合のみ、自己の意味を第一被限定

者とする知識を生じさせる」¹⁴⁾、「ある vibhakti が同一性 (tādātmya) と異なる自己の意味に対する語幹の意味の〔関係の〕理解に対して本質的に生起させる能力がない場合、それは第一格である」¹⁵⁾と述べられている。このように、同一性を意味しない第一格が接続する名詞語幹の意味が第一被限定者となり、その第一格はいかなる関係も理解させない。

以上をまとめよう。「AがBを限定する」という関係を「A→B」と表すと、文を構成する pada によって理解される padārtha 間の限定被限定関係は、名詞語幹の意味→格語尾の意味→語根の意味→人称語尾の意味→第一格が接続する名詞語幹の意味、となる。例えば、‘devadatto grāmam gacchati’ という文は、‘devadatta’ ’sU’ ‘grāma’ ‘am’ ‘gam’ ‘tiP’ という pada から構成されている。第一格をのぞくそれぞれの pada の意味の限定被限定関係は、‘grāma’ の意味→‘am’ の意味→‘gam’ の意味→‘tip’ の意味→‘devadatta’ の意味、となる。すなわち、村→〔行為対象性 (karmatva)〕→行く行為 (gamana)→努力 (kṛti)→デーヴァダッタとなり、最終的に、村〔を行為対象とする〕行く行為〔を生起させる〕努力〔を有する〕デーヴァダッタ (grāma-karmaka-gamana-janaka-kṛti-mān devadattah) という関係が理解される¹⁶⁾。この場合、行為対象性とは、行為から生起した結果を伴うこと (kriyājanyaphalaśālitva) である¹⁷⁾。また ‘devadattena grāmo gamyate’ という場合、第一格をのぞくそれぞれの pada の意味の限定被限定関係は、‘devadatta’ の意味→‘Tā’ の意味→‘gam’ の意味→‘ta’ の意味→‘grāma’ の意味、となる。すなわち、デーヴァダッタ→努力→行く行為→結果 (phala)→村となり、デーヴァダッタ〔に在る〕努力〔から生起する〕行く行為〔から生起する〕結果〔をとまなう〕村(devadadatta-vṛtti-kṛti-janya-gamana-janya-phala-śāli grāmaḥ) という関係が理解される¹⁸⁾。〔 〕で括った padārtha は関係である。このように、padārtha の側からみると、次の限定被限定関係がある。①名詞語幹の意味→〔行為を成り立たせる〕→行為→努力→アートマンという関係、および ②アートマン→努力→行為→結果→名詞語幹の意味という関係である。①と②では、padārtha 間の限定被限定関係はちょうど逆になっている。

次に規定者と被規定者の間の関係をみよう。それは、上記において「村を行為対象とする行為」「行為を生起させる努力」「努力から生起した行為から生起した結果」「努力を有するデーヴァダッタ」「デーヴァダッタに在る努力」というふうに述べられている、行為を成り立たせる要素と行為の関係、あるいは行為と努力の間の生起させられるものを生起させるものの関係、努力とアートマンの間

の保持されるものと保持するものとの関係、である。Nyāya 学派では、あるもの(結果)に対して欲求が生じ、行為を起こしてそれを獲得する過程を次のように考えている。①結果を対象とする知識が生起する②結果を対象とする欲求が生起する③行為が努力によって達成されること (kṛtisādhyatā), および行為が結果を達成する手段であること (iṣṭasādhanaṭā) を対象とする知識が生起する④行為を対象とする欲求が生起する⑤行為を対象とする努力が生起する⑥行為が生起する⑦結果が獲得される¹⁹⁾。これらの事態が述べられている。

さて、人称語尾の意味の一つである時間はどのような限定関係をもつのだろうか。まず IAT をみてみよう。TA では、PS. 3. 2. 123. に基づき、IAT は現在性 (varttamānatva) を表示すると考える²⁰⁾。例えば、先に挙げた 'devadatto grāmaṃ gacchati' という文から、grāma-karmaka-gamana-janaka-varttamāna-kṛti-mān devadattaḥ という関係が理解される。このように、IAT の意味である現在性は、人称語尾の意味である努力を限定する。現在性とは、語の使用の保持者である時間に在ること (tattacchabdaprayogādhikaraṇakāla (vṛtti) tva) であり²¹⁾、これは語が使用される時点で、まだ行為が生起していないことを示している。次に IRT と IUN をみてみよう。TA では、PS. 3. 3. 13. に基づき、IRT は未来性 (bhaviṣyattva) を表示すると考え、その未来性を現在の未生無の pratyogin であり生起を有すること (vidyamāna-prāgabhāva-pratyogy-utpatti-ka-tva) と定義する。例えば、'gamiṣyati' という文から、現在の未生無の pratyogin である生起を有する行く行為 [を生起させる] 努力 [を有する] (vidamāna-prāgabhāva-pratyogy-utpattika-gamana-anukūla-kṛti-mān) という関係が理解される²²⁾。また、PS. 3. 2. 110. に基づき、IUN は過去性および生起 (utpatti) を表示すると考え、その過去性を現在の已滅無の pratyogin であること (vidyamāna-dhvaṃsa-pratyogi-tva) と定義する²³⁾。例えば、'agamat' という文から、現在の已滅無の pratyogin である生起を有する行く行為 [を生起させる] 努力 [を有する]、という関係が理解される²⁴⁾。このように、IRT および IUN の意味である未来性、過去性は語根の意味である行為を限定する。

未来性、過去性という規定者と、行為という被規定者との関係は上記の例のとおりである。補足すると、未生無とは、生起の前の内属因における結果の関係無であり、已滅無とは、生起の後の内属因における結果の関係無である²⁵⁾。従って、現在語が使用されている時点でアートマンに在る未生無の pratyogin である行く行為、あるいは已滅無の pratyogin である行く行為、という関係になる。

二つの行為の間の時間的前後関係も、後の行為の未生無と同時である前の行為、あるいは前の行為の已滅無と同時である後の行為、というふうに理解される。

2. TA では、以上の原則をふまえて lakāra, dhātvaṃśa, kṛt を含む文からどのような関係が理解されるかを述べている。例えば、yañ を含む文 'caitraḥ pāpicyate' という文からは、ある一定期間にわたる料理行為と同種類の別の〔料理〕行為の已滅無と同時である料理行為〔を対象とする〕現在の努力〔を有する〕チャイトラ (idānintana-pāka-sajātiya-kriyāntara-dhvaṃśa-kālina-pāka-viṣayaka-kṛtimān caitraḥ) という関係が理解される²⁵⁾。その原則とは次のものである。padārtha 間の限定被限定関係は、名詞語幹の意味→格語尾の意味→語根の意味→人称語尾の意味→第一格が接続する名詞語幹の意味、となっている。lakāra の意味、dhātvaṃśa の意味、kṛt の意味は、語根の意味を限定したり語根の意味に限定されたりする。またそれらの意味である時間、すなわち現在性は努力を、未来性や後続性、過去性や先行性は行為を限定する。

- 1) TA は名詞語幹の分類、間接表示関係の分類および限定複合語 'rājapurusaḥ' の解釈において ŚŚP と見解を異にし、TA を Jagadīśa の著作とみなすかどうかは検討の余地がある。例えば、'rājapurusaḥ' について、TA は、前分が王との関係をもつものを間接表示しそれが後分の意味に同一関係によって結びつく主張し、前分が王との関係を間接表示するという *Tattvacintāmaṇi* の見解を排除する。これに対して ŚŚP は後者を認める。 2) 『哲学年報』31, 1972 3) TA, p.88 4) TA. p.87 5) ŚŚP. p.31 6) ŚŚP. p.68 7) ŚŚP. p.284 8) ŚŚP. p.283 9) PS. 1.4.14. 10) ŚŚP. p.285 11) ŚŚP. p.294 12) ŚŚP. p.395 13) ŚŚP. p.288 14) ŚŚP. p.39 15) ŚŚP. p.283 16) TA. p.91 17) TAv. p.91 18) TA. p.93 19) NSM. pp.472-474 20) TA. p.91 21) TAv. p.92 22) TA. p.94 23) TA. p.94 24) TAv. p.96 25) TK. p.20 26) TA. p.100

略号 TA: *Tarkāmṛta with vivṛti*, Biblioteca Indica 302. TAv: see TA.

ŚŚP: *Śabdaśaktiprākāśikā*, Kashi Sanskrit Series 109.

PS: *Aṣṭādhyāyī*.

NSM: *Nyāyasiddhāntamuktāvalī*, Kashi Sanskrit Series 212.

TK: *Tarkakaumudī*, Sophia Indological Series 4.

〈キーワード〉 *Tarkāmṛta*, śābdabodha, 言語論

(東京大学大学院)